

講演④

関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立

講演者紹介

若狭 徹（わかさ とおる）

明治大学文学部史学地理学科卒業。高崎市教育委員会文化財保護課長を経て、現在、明治大学文学部准教授。史学博士。専門は日本考古学。

「関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立」

明治大学文学部准教授 若狭 徹

はじめに

皆さんこんにちは、ご紹介いただきました。明治大学の若狭でございます。私は、これまでの先生方とちょっと研究している時代が違いまして、少し古い古墳時代を専門としております。ですので、今日このあとの議論が囁み合うか、とても不安なんですけれども。私は今日、話題になつております東北城柵の前史をご紹介したいと思います。どのように東北の農耕社会が開かれていて、城柵が現れるかというプロセスを紹介してまいりたいと思います。よろしくお願ひいたします。

一 古墳文化と前方後円墳ネットワーク

今日話題になつています「城柵」は、飛鳥・奈良時代以降の大規模な列島改変、そこへの国家的なアプローチの象徴だったわけですね。そこで今、ご紹介があつたような対蝦夷戦争も行われているとということで、その対象となつた蝦夷のイメージはというと、国家にまつろわぬ人々、王化と制圧の対象、それから中央から見ると得体がしれない存在と、そういう像が描かれているわけです。ただ、果

たしてそうなのかというのを、古墳時代を通じて考えてみたいと思います。と申しますのも、ここにいらっしゃる皆さんは関西、古墳の本場の方々です。巨大前方後円墳があるのを、日々見慣れていらっしゃる方々ですが、東北にも大きな古墳があるのですね。そして、その古墳時代の三五〇年の間には、大規模で波状的な南北関係があるわけなのです。それは大きく三つ。一つは集団移動と耕地開発です。これは環境変動を伴つております。それから渡来技術の導入と新産業の展開、朝鮮半島との交流の中で新しい技術の波、人がやつてくるという波がありました。

そして、それを結ぶ、北海道から朝鮮半島にまで至る「長距離物流ネットワーク」、これが古墳時代に結ばれているわけです。その結果、東北にも前方後円墳が築かれていきます。古墳時代の始まりと終わりは前方後円墳の出現と終わりで象徴されるのですが、そこには「前方後円墳システム」、「前方後円墳ネットワーク」というのが築かれたと考えられております。古墳時代になる前の弥生時代というのは、バラバラに国々が併存している社会です。それを乗り越えて、前方後円墳という同じ形のお墓、同じ考え方で結ばれる連合体ができたのが古墳時代の特色なわけです。ですので、東北に前方後円墳があるということは、そういうシステムに加入しているのだと考えられます。前方後円墳というのはランドマークでありますので、前方後円墳があるところは、安全に物



が行き交うような経済圏が確立している。海運とか陸路とかの安全保障体制、夜盗に襲われず海賊に襲われずに安全に物が行き交うような体制が確立したのです。そういうランドマークとして前方後円墳があるところを目指して、人々が交流する、そういうネットワークができた。これが古墳時代の大きな特色だと思います。そういうシステムに東北は入っているわけです。その辺を確認しておきたいと思います。

二 古墳文化の成立と北進

(一) 前期古墳文化の成立

それで、東北地方の古墳時代がどう始まるかということなのですが、東北地方の弥生時代後期はちょっと人口が少ないのでですね。遺跡が非常に少ない。比較的広い土地が空いているような状態でしょうか。その南にあります関東地方の地図が図1です。関東地方の弥生時代はご覧のように小さな土器様式圏がありまして、それぞれ国々のようなものがあるわけです。そういう状況が三世紀になりますと大きく解消されます。このAとBの波があるのでけれども、東海地方から大量に人が入ってくるのです。この関東にも人がたくさんいるのですけれども、実は関東の弥生人たちは低湿地の開発が苦手なのです。ジメジメしたところをほつたらかしにしてありました。そういうところに東海地方から木曽三川が流れる濃尾平野を開拓してきたような、ジメジメした土地が好きな集団が大量に入つてく

るのです。そして、在来弥生人がいないような低湿地を大規模に開発していきます。そして使えなかつた低湿地をまたたく間に水田に変えていって関東に大きな前方後円墳や前方後方墳が登場するという流れがあります。この流れが、もう一つの流れを生みます。特に、この房総地域の集団がこの流れに突き動かされて、北関東へ拡散していくのです。それまでこの地域には首長があまりいなかつたり、「環濠集落」という守りの村がない。比較的そういう緩やかな社会が存在していました。そこに東海集団が拡散をしていくて、それまでとは違う階層社会を作り上げていく。そして、この余波がこの「ひたちなか」辺りの大きな港から、さらに船に乗って北のほうに波及していく、あるいは中通りを通つて東北に入つていくということで、この房総地域の集団が大きく展開をして、東北に大量に入つていく

ということが分かつています。

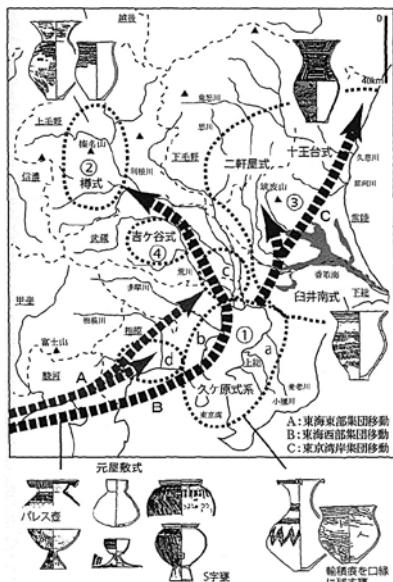


図1 関東における古墳文化の成立

このように、太平洋岸では東海地方の集団が、日本海側では北陸北東部集団が東北地方へ大規模に動いて行く現象がありまして、これは環境難民だという考えが最近なされています。最近、環境学者の研究、自然科学の方の研究がたいへん進みまして、遺物の中に封じ込められた酸素同位体でとか、湖にたまつた年縞という砂の層、そういう



写真1 宮城県伊治城跡出土の塩釜式土器
(栗原市築館出土文化財管理センター)

うところを分析していく中で環境変動のことが分かってきて、弥生時代後期にはものすごく雨が降ったということが判明しています。実は、いま我々が暮らす社会はすごく安定期にあります。最近大雨がありますけれども、弥生後期には、ああいう状態が何百年も続いたということが分かっています。要は田んぼが作れなくなつた北陸、あるいは東海の人々が環境難民として北上してくるということが分かってきたのです。そういった集団が関東地方の弥生社会を再編すると、玉突きのように千葉県地域の人たちが北進し、東北に定着していくのですが、その結果として成立しているのが東北地方の古墳時代前期の土器様式です（写真1）。この中に在来の東北の弥生系の要素がほとんど残つていなゐのです。特に、右端のような平底の甕、煮炊き具が定着するのですけれども、この甕の形式が房総地域、千葉県地域にあるということで、千葉県地域の集団が大挙して移動していく北関東や東北の太平洋側の弥生文化を開くということが証明されているのです。

そうやって、4世紀の前半には東北地方に前方後円墳が出現してまいります。東北の古墳の変遷を示したのが表1で前期前半、前期後半、中

	前期前	前期後	中期前	中期後	後期前	後期後	飛鳥	城柵
畿内	オオヤマト	佐紀	百舌鳥・古市		今城塚	五条野丸山 藤ノ木	石舞台 岩屋山 野口王墓	
関東	山道	前橋天神山 前橋八幡山 将軍塚	浅間山 大鶴巣 野本将軍塚 上侍塚	太田天神山 別所茶臼山 白石稻荷山 お富士山	井出二子山 並榎稻荷山 摩利支天塚 埼玉稻荷山	七興山 埼玉二子山 琵琶塚 丸墓山	綿貫觀音山 八幡觀音塚 埼玉鉄砲山 吾妻	宝塔山 八幡山 壬生重塚 山王塚
	海道	今富塚山 宝来山 星神社 梵天山	姉崎天神山 草間山 芝丸山	舟塚山 内裏塚 高柳鏡子塚 三分目大塚	姉崎二子山 祇園大塚山 三昧塚	九条塚 玉里舟塚	三条塚 金冠塚 大堤権現塚 風返稻荷山	龍角寺岩屋 駄ノ塚 船玉
陸奥	中通り	● ■	■ 大安場		国見八幡塚	● ● ●	● ● ● 下総塚	谷地久保 蝦夷穴 ○ ○
	浜通り	■	■ 桜井 玉山			●	● ●	○ 金冠塚
	阿武隈下流	●	● 愛宕山	● ●	方領権現			
	仙台平野	■ ■ 飯野坂	■ ■ ■ ■	経の塚 ○	● ● ○	○ 一塚	○ 宝領塚	郡山 多賀城 724
	大崎平野	■	● 青塚	○ ○ ○	名取大塚山 ○ ○ ○	○ 二塚		伊治城 767 名生館 城生 宮沢
	胆沢		会津大塚山		○ 念南寺			胆沢城 802
	会津盆地	● ● ● ■ ■ ■	● ● ● ○ ○ ○	○	○ ○ ○			
越後北		● 菖蒲塚 ■	● 古津 ○ ○ ○ 城の山	○ 牡丹山	○			渟足柵 647 磐舟柵 648
出羽	米沢盆地	■ ■ ■	●		● ●		○ 金原	優嗜曇柵
	山形盆地		■ ○	大師森山 石榴	○ 菖沢 2 ○ 大之越			
	庄内			菱津石榴				出羽柵 108

表 1 古墳の推移と城柵の関係

期前半、中期後半、後期前半、後期後半というふうになつております。

これを見ていただきますと、東北地方では前期のうちにもう大きな前方後円墳がたくさんできているのがわかります。四角い印は前方後方墳で東海系統のお墓、それから丸い印が前方後円墳で大和王権と結びついた豪族のお墓になりますけれども、四世紀の後半にはもう大きな前方後円墳がたくさん林立しているというのがおわかりいただけるかと思います。しかしながら、中期の前半、ヤマトでは古市・百舌鳥古墳群の頃ですが、その頃になるとこうシユーッとしほんでしまうのです。この頃から寒冷化になつたともいわれています。古墳寒冷期というのですけれども、ものすごく寒くなつたと、そういうことで一度定着した農業がここでいつたん破綻している可能性も考えられます。しかし、中期後半になりますとまたググッと古墳がたくさんでてくるという振り戻し現象があります。そして後期前半、繼体朝の頃なのですけれども、その頃はまた少し縮みます。そして、後期の後半になりますと福島県を中心に、また振り戻しで前方後円墳が再出現しまして、飛鳥時代になると群集墳とか横穴墓が大量に築かれると、こういう流れを示しています。

(二) 共立王の登場

前方後円墳が出てきたり無くなつたり、出てきたりという繰り返しをしながら継続していくのです。図2は大きな古墳、東北地方における100m級前方後円墳、前方後方墳の図面を貼り込んでみました。前期前半に会津地方の方で大きな前方後円墳が登場しまして、そのあと前期後半にピーコを

	出羽 越後	会津	中通り 浜通り	仙台平野	大崎平野 胆沢
前期前半		堂ヶ作山		桜井	
前期後半	日本海側最北の 前方後円墳 菖蒲塚 稻荷森 亀ヶ森	会津大塚山 大安場 玉山 愛宕山	大安場	遠見塚 雷神山	青塚
中期前半				名取大塚山	
中期後半				角塚	日本最北の前方後円墳

図2 東北地方の大型前方後方墳・前方後円墳
(墳長80m前後以上と最北の事例)

迎えます。雷神山古墳は、宮城県の名取市にあるのですけれども、これなどは一六八mという大きな前方後円墳です。こんなものが登場しているというのが、東北の古墳時代前期の実像ということになります。図3は古墳前期の東日本の状況を示した図なのですけれども、くり返しになりますが、東海集団が南から入ってきた。これに突き動かされた房総の集団が東北の方に陸路、それから海路で入ってきます。この海路で行く途中にも大きな古墳が作られていて、この二つのルートが結ばれるところに雷神山古墳ができます。ですので、仙台平野周辺、名取川の流域というのは陸路と海路が合わさる交通ネットワークの要所、交易の要所だと思います。一方、日本海側の北陸の環境難民は日本海を北上しまして新潟を経由して、阿賀野川ルートから会津に入ります。会津盆地にも大きな古墳がたくさんできるのですが、それは北陸集団が拓いていくのです。このように、北陸集団と東海集団、その余波の南関東集団の北上によって東北の古墳時代は拓かれているという形です。

(三) 古墳文化の最前線

この頃、北海道の続縄文集団

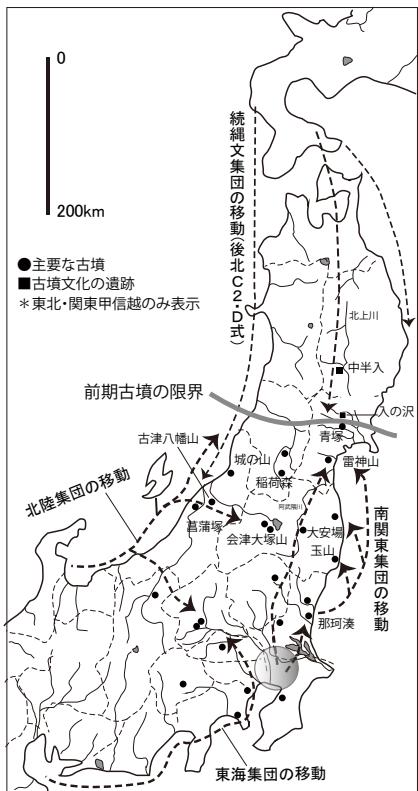


図3 東北・関東の古墳時代前期の関係図

迎えます。雷神山古墳は、宮城県の名取市にあるのですけれども、これなどは一六八mという大きな前方後円墳です。こんなものが登場しているというのが、東北の古墳時代前期の実像ということになります。図3は古墳前期の東日本の状況を示した図なのですけれども、くり返しになりますが、東海集団が南から入ってきた。これに突き動かされた房総の集団が東北の方に陸路、それから海路で入ってきます。この海路で行く途中にも大きな古墳が作られていて、この二つのルートが結ばれるところに雷神山古墳ができます。ですので、仙台平野周辺、名取川の流域というのは陸路と海路が合わさる交通ネットワークの要所、交易の要所だと思います。一方、日本海側の北陸の環境難民は日本海を北上しまして新潟を経由して、阿賀野川ルートから会津に入ります。会津盆地にも大きな古墳がたくさんできるのですが、それは北陸集団が拓いていくのです。このように、北陸集団と東海集団、その余波の南関東集団の北上によって東北の古墳時代は拓かれているという形です。

という農耕を行つてない集団が、南下をしてきまして点々と痕跡を残すのですけども、その境界が宮城と新潟を結んだラインになります。これが前期古墳の限界線ですね。この、ここはちょうど先ほど八木先生の城柵ネットワークのあの線と一致しております。青塚古墳というのが最北端の前方後円墳です。そして、この青塚古墳から二〇kmほど北上した宮城県の県北に入る沢遺跡というのが出現します。四世紀後半の環濠集落で、こういう集落（図4）です。尾根のトップのところに深い堀を巡らせ、さらに柵を巡らせているという防衛集落です。この防衛集落のすぐ下が実は伊治城なのです。
伊治公^{これはり}皆^{きみ}麻呂^{あざまろ}が反乱を起こした伊治城、律令期の七六七年の最前線、そこと同じところに古墳前期の最前線があるというのは非常に示唆的ではないでしょうか。しかも、伊治城は平地なのですけれども、入の沢遺跡は丘陵上にあるということでより防衛性が高いということなのです。写真2～4が入の沢遺跡です。高いところに深い堀を巡らせています（写真3）。張り出しもあります。それからこれ柵の掘り込み（写真4）なのですけれども、1mぐらいの深い溝を掘つて柵木を立てていくという堅固な集落です。そして、家が焼けています。襲われているのです。その焼けた家のところから青銅鏡が四枚でできているのですけれども、これ通常ですと東北地方の相当上位の古墳に入る鏡です。東北地方では、八〇m級の古墳でも鏡を副葬していらないのがありますので、こここの遺跡にいた主は亡くなれば相当大きな古墳に入つた人だつたということが分かるんです。そういう首長層が、この高い集落で防衛をしているというのが東北の古墳時代最前線であり、まさにその伊治城と同じところにあるとい

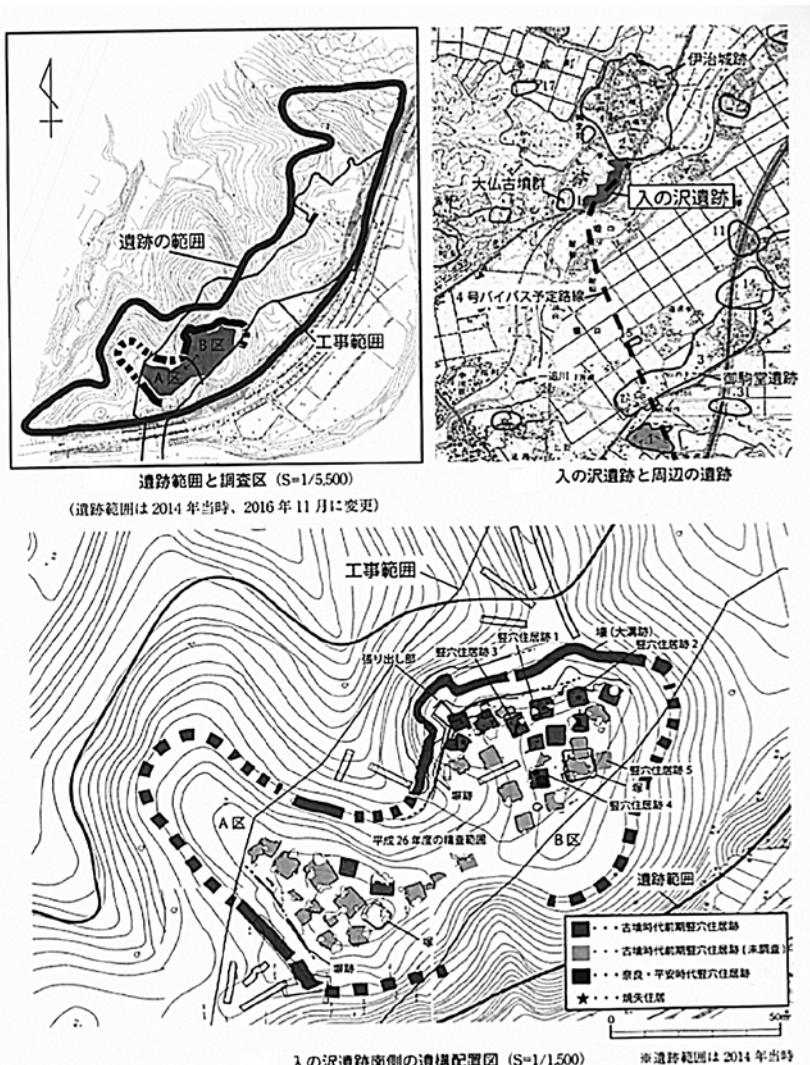


図4 入の沢遺跡
(村上祐次 2017 「入の沢遺跡の調査結果」『古代倭国北縁の軋轢と交流』雄山閣)



写真 2



写真 3



写真 4

写真 2～4 入の沢遺跡

(写真は辻秀人編 2017『古代倭国北縁の軋轢と交流』
雄山閣より)

うものです。

それからその伊治城の下層部でも古墳前期の溝で囲われた村が出ていますので、平地の拠点と山の上の防衛拠点があるという二重構造を持っています。ただ、この防衛対象が南下する続縄文集団に対してなのか、それとも古墳文化の中の鬭争合いなのか明らかではありません。これからもっと研究が必要かと思います。

三 空疎化する東北の古墳中期前半

(一) 大型前方後円墳の不在

ここで、東北の大きな前方後円墳をご紹介します。写真5が太平洋側最北の大型前方後円墳、青塚古墳です。前方部が削られているのですけど、大崎市にあります。それから日



写真5 青塚古墳（宮城県大崎市）



写真6 稲荷森古墳（山形県南陽市）

本海側最北の前方後円墳としては、山形県の南陽市に稻荷森古墳（写真6）があります。そして、先ほどの八木先生のお話の防衛ラインの要のところの仙台平野には最も大きな一六八mの雷神山古墳が成立をしております。この前期後半の東日本の大規模前方後円墳を挙げていきますと、一番は群馬県の浅間山古墳です。一七二mです。二番目は、甲斐銚子塚古墳で、これは山梨県にあり、一六九m。そして第三位が雷神山古墳。この三基はほぼ同じ大きさですよね。で、四世紀後半の西日本を含めた巨大前方後円墳を挙げていくと大王墓とみられる佐紀陵山古墳、二〇九m、宝来山古墳が二二七mで、東日本の三古墳とあまり差がないで



写真 7 雷神山古墳

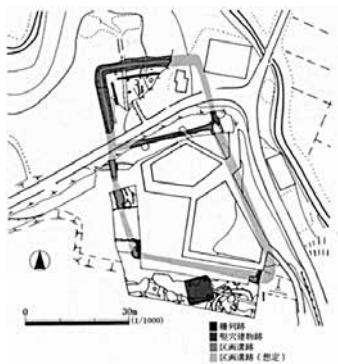


図 5 伊治城の古墳前期遺構
(大谷基 2014『伊治城』『古墳と続
縄文文化』高志書院。原典は築館町
教委 1988)

すね。倭王権の力が、まだそれほど強固じゃありませんので大王墓と地方豪族墓がそんなに差がない時期です。それから丹後半島にも二百m級の古墳がありますし、播磨の淡路海峡を押さえている五色塚古墳も一九四m、後に吉備氏が登場してくる吉備の金蔵山古墳一六五m、それからなんと九州南端部の大隅半島にも一五〇mの唐仁大塚古墳があります。中央の古墳が突出しておらず、周辺にも大きな前方後円墳があるというのがこの頃の特徴です。

したがつて、雷神山古墳に埋葬された人は、東北地方の共立王、諸豪族たちに支えられた人で、私は倭王権の同盟者の一員ではなかつたかと考えております。四世紀後半というのは倭王権と地方豪族の同盟の強化がなされ、王権側は初めて对外進出をするという時期なのです。広開土王碑（中国吉林省集安市）が五世紀初頭に刻れますけども、四世紀の終わり頃に倭と高句麗軍が激突したと書かれています。そういう東アジアと倭国の枠組みの中に、この東北の王が入つてい

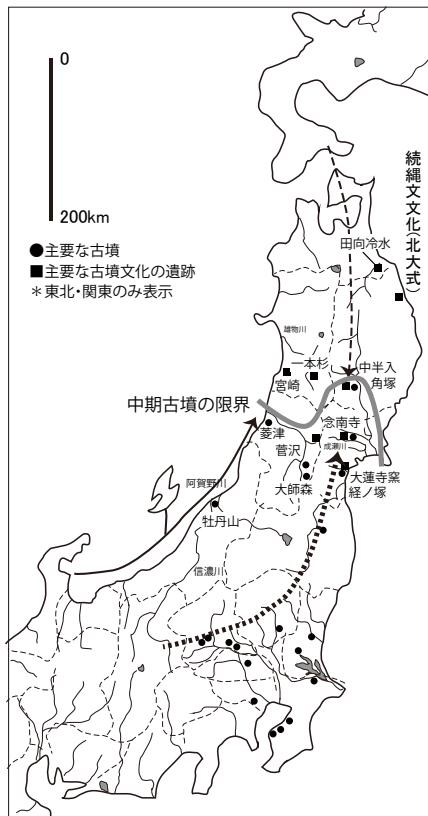


図 6 東北・関東の古墳時代中期の関係図

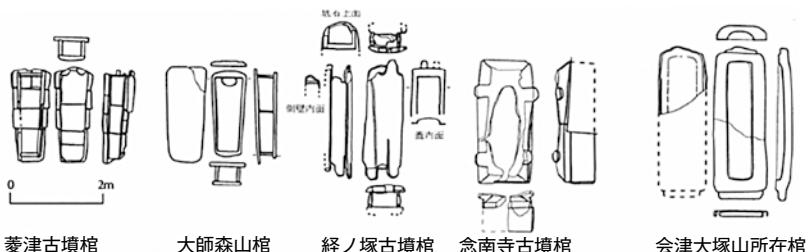


図 7 東北地方の石棺 (石橋 2013)

てもぜんぜんおかしくないんじやないかと思います。



写真 8 菅沢 2号墳出土の畿内系埴輪

つづいて、中期の前半、ここは少し低調になるのですけども、中期の後半になりますと、またグーッと古墳文化が東北に伸びていくわけです(図6)。一つは日本海ルートが機能しています。新潟市の阿賀野川河口近くに牡丹山古墳ばんだんやまという新潟県で唯一、埴輪を持つている古墳ができます。後の渟足柵とほぼ重なる場所です。やはり、後の「城柵」は古墳時代の交易拠点、あるいは経営拠点と重なっているということが明らかです。このラインが海沿いに北に伸びていきまして、山形県に石棺文化が及んでいるのです。それから写真8のような畿内系埴輪の文化もこの頃に山形県に導入されていきます。一方、この頃、太平洋側でも前方後円墳が北上しまして、岩手県南部の奥州市の角塚古墳、ここまで北上していくことになります。このように、この時期は古墳群が一番、北進しまして畿内要素が強く入ってくる。そして、鉄器生産や馬生産、それから焼き物、特産品の琥珀の加工などの手工業が隆盛してくる時期です。さらに、東北にも

長持形石棺(4世紀末～5世紀中葉) 以降の石棺文化

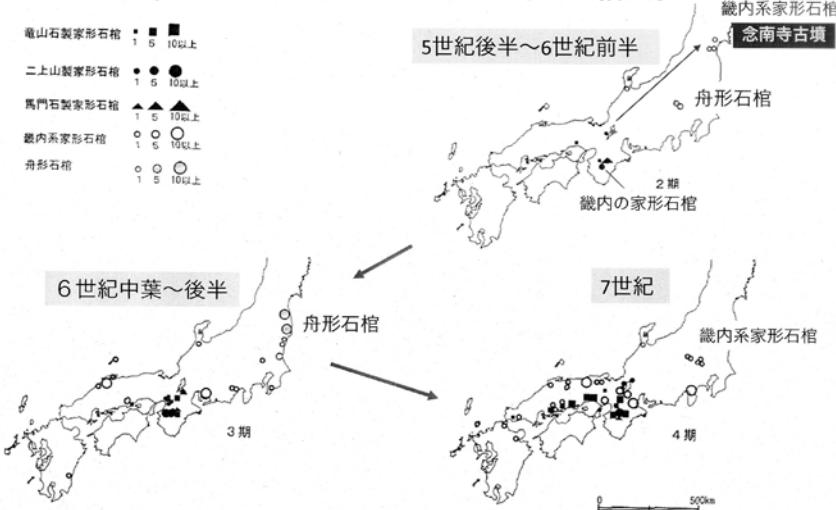


図8 5世紀後半以降の家形石棺・舟形石棺の分布推移図
(石橋宏 2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房より)

朝鮮半島系文物がちらほら見え始めたり、続縄文集団との交易、南北交易が強化される時期で、図6のような流通ネットワークができるときます。

(二) 点的に存在する西の要素(図8)

西日本系石棺文化の展開について補足する
と、この時期には、長持形石棺（石を組み合わ
せて作る大王の棺といわれている石棺）が畿内
では流行するわけですが、その長持形石棺
の模倣品、こういう立派な石棺が山形県の山中
の洞窟遺跡から出てくるのです（写真9）。こ
れ今年の夏、私、山登ってきたのですが、この
海岸部にやはり長持形石棺が導入されており、
この北縁の地まで畿内系の石棺文化がいち早く



写真9 山形県大師山洞窟（左）と長持形石棺（右）



写真10 念南寺古墳の家形石棺

及んでいるということがわかつています。

その長持形石棺に続きまして、畿内の方で流行してくるのが家形石棺なのです。その家形石棺も実は東北地方にあります。日本の中でも古い時期の家形石棺が宮城県から見つかりました。宮城県の北縁部の念南寺古墳の埋葬施設から、この家形石棺が出てきてみんなびっくりしたわけなのです（写真10）。と申しますのも、念南寺古墳の石棺のほかにさらに二つの家形石棺が東北地方にあります。が、実はこの頃の関東にはないんです。関東はこの頃、一段階古いタイプの舟形石棺というのを使つていました。大和の方で家形石棺が採用されるや、その出現したばかりの一番ニューモードの石棺を、関東を飛び越えて東北が持つているという現象なのです。中間地



写真 11 角塚古墳 (岩手県奥州市)

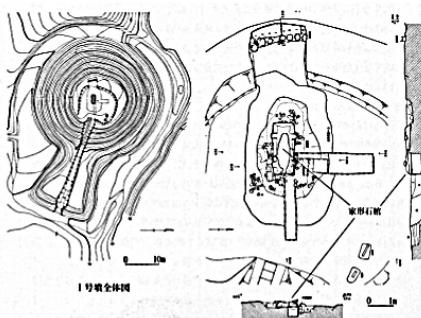


図9 念南寺古墳と石棺出土状態

(高橋誠明 2014「古墳築造終焉域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』。原典は宮城県教委 1998)

点を飛び越えてしまっているということなのです。関東で家形石棺が出てくるというのは六世紀末になつてからなんです。それよりも百年以上古く東北の仙台平野周辺に家形石棺が導入される、そういう動きに注目する必要があります。

四 北進する前方後円墳——中期中葉から後半の動態——

(一) 関東の渡来人編成と前方後円墳の北上

この時期に北まで伸びていった古墳文化の象徴が、北縁の前方後円墳、角塚古墳です(写真11)。この角塚古墳のすぐそばから見つかったのが、中半入遺跡(なかはんにゅう)です。三〇m四方ぐらいを堀で囲んだ環濠遺構です(図10)。この中から竪付きの堅穴住居跡が出てきています。朝鮮半島から竪が日本に導入されて間もなく、東北まで導入されている。それから大阪で焼かれたきれいな須恵器がたくさん持ち込まれています。加えて、馬の遺体。日本で馬の生産が始まったのが、五世紀頃からなのです。その馬は国家財産になつていくのですけれども、その馬がいち早く五世紀

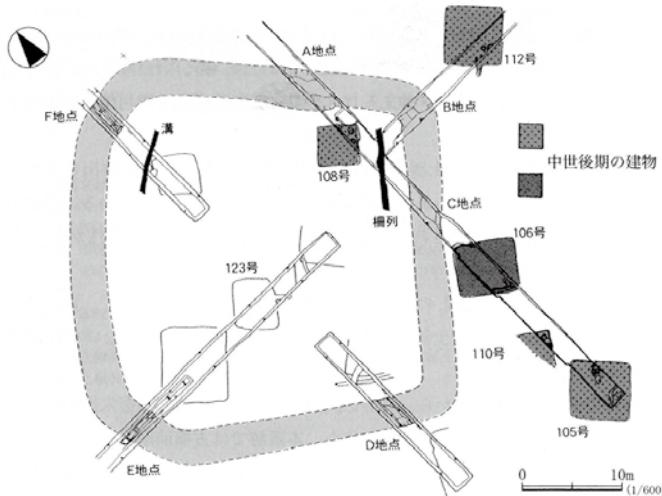


図 10 中半入遺跡の溝区画遺構

(大谷基 2014 「中半入遺跡」『古墳と続縄文文化』高志書院。原典は岩手理文 2002)

後半に東北にまで及んでいる。私はこの一帯で馬生産をしていてもおかしくないのでないかなと思います。そのほかにも鉄器製作痕跡が出てきており、手工業を中心として産業振興をしている豪族がいる。その豪族が、この角塚古墳に葬られるという流れがわかるわけです。

加えて注目されるのが続縄文土器と黒耀石製石器(図11)、これが出てまして、続縄文集団が加工した革などを西に流すという、物流拠点、生産拠点になつていて可能性が高いということがわかつています。ということで単なる古墳だけではなくて生産拠点そのものが、ここまで北上し、中半入遺跡などを核にして北の集団と交易網を結んだとみられます。続縄文系の皮革加工職人を抱えこんでいる可能性すらあるわけなのです。この中半入遺跡と角塚古墳が実は後の胆沢城のすぐそば、数kmの距離にあります。

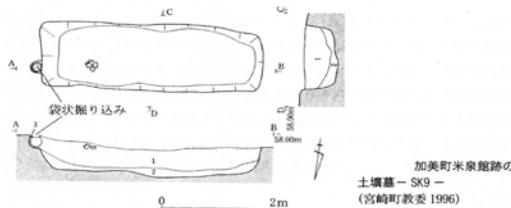
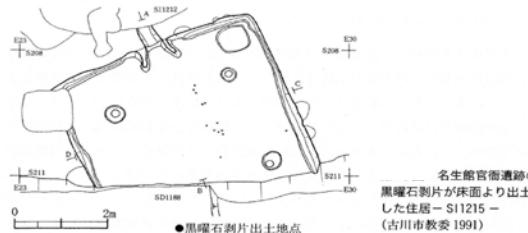


図 11 続縄文系石器と続縄文墓制
(高橋誠明 2014「古墳築造終焉域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』。
原典は古川市教委 1991、宮崎町教委 1996))

伊治城もそうでしたが、古墳時代の交易の最前線、地域経営の最前線が律令期の胆沢城とトレースされているというところも、非常に面白いですね。

なお、前方後円墳はここまでしかないのですが、古墳文化集団はもっと北上していくまして、青森県八戸市田向冷水遺跡からは、竈つきの竪穴住居が見つかっています（図12）。出てくるものも土師器です。北東北の遺跡ですけれども古墳文化の土器を使っているわけですね。そういう集

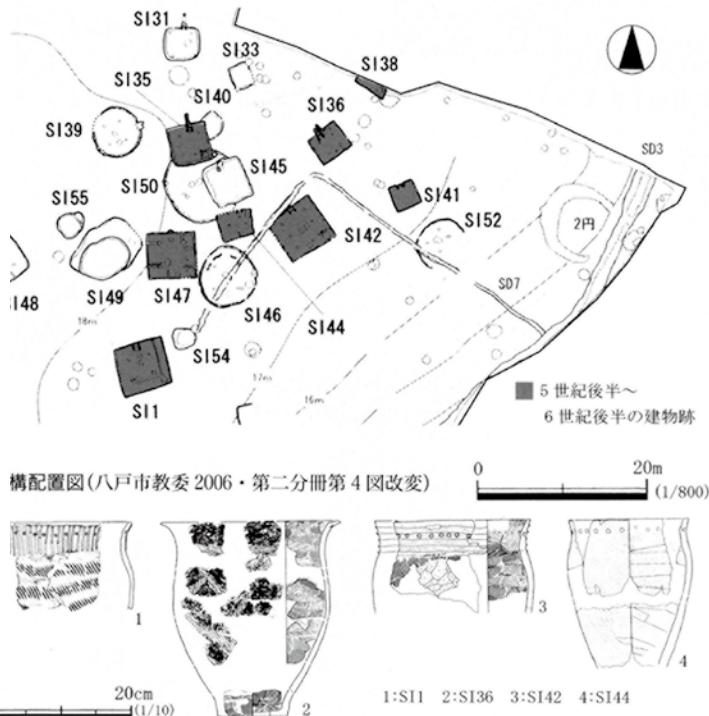


図 12 田向冷水遺跡

(大谷基 2014 「田向冷水遺跡」『古墳と続縄文文化』高志書院 * 原典は八戸市教委 2006)

団が本州北辺に入ってきてている。一方、そういうところに続縄文の土器もあつたり、黒曜石製石器があつたりしながらその交易関係も結んでいる。古墳文化の開拓者、交易者はどんどん北上しているのです。それから、在地の続縄文集団のお墓には、副葬品として立派な須恵器や土師器が入れられています。あちらの集団にも古墳文化側の文物が受容されていることがわかります。

(二) 山形県地域の展開

それから日本海側の山形県にある大之越古墳に触れておきます (図13)。山形盆地にある中規模

の円墳で五世紀後半のものです。この円墳からは、図13の遺物が出ていまして、これペンチなのですから、鉄鉗といいまして、鍛冶屋さんが鉄を打つときに持つペンチなのです。



それから、非常に古い馬具があります。それから鉄の斧があります。ただこの斧もちょっと不思議な形をしておりますので、渡来系の遺物の可能性があります。もう一つはこの大刀です。環頭大刀といつて鳳凰がモチーフの大刀です。日本ではこの大刀はたいへん流行するのですけれど、それは六世紀なのです。ところがこの古墳は五世紀の後半なのです。図14は、五世紀後半の環頭大刀の分布なのですが、ほとんど輸入品です。朝鮮半島から招来された環頭大刀を西日本人たちが持っているのが分かる。しかし、北で持っているのは、この東北の大之越古墳だけなのです。ということでお、大刀の系譜、その他の鉄鉗とか、馬具を持つているということを考えますと、この大之越古墳の被葬者というのは非常に渡来色の強い人の可能性があると思うのです。倭人だとしても渡来系の集団と非常に密接な関係を持っている人でしよう。この時期になりますと東北にも朝鮮半島系の文物を持つ

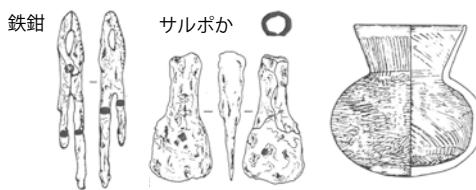


図13 大之越古墳の出土品

(石井浩幸 2004「山形県南部における古墳主体部の副葬品」『出羽の古墳時代』高志書院)

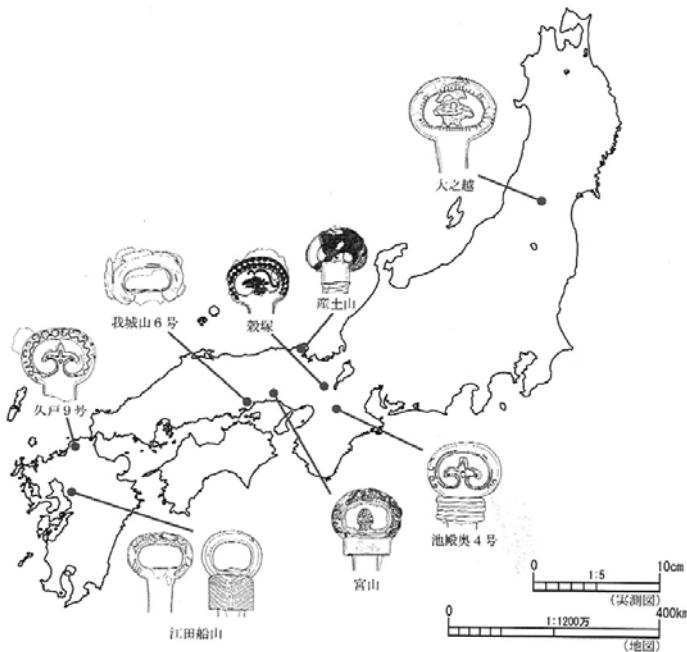


図 14 中期後半における装飾付環頭大刀の分布
(金宇大 2017 『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版)

すけれども、そういう新産業を倭王権の委任を受け、東国で始めていると思います。そして、そこで育った馬を大和に送っていると思うのです。そういう波がこの出羽の地にもいち早く及んでいると考えることが可能です。

そして、後期の前半には東北の古墳文化はまたちよつと落ち込むのですが、後期の後半になりますとだいぶ状況が変わってきます。

た人やその技術が流れこんでいるということなのです。この頃、北関東の群馬県地方、それから長野県地方などでは渡来人を大量に導入しまして馬生産を始めていきます。四世紀末に、高句麗で騎馬軍団に負けた倭人は、これからは東アジアでやつていくには馬を導入



写真 11 名生館遺跡出土の関東地方土器系（左下）



写真 12 山畠横穴墓群（宮城県大崎市）

五 東北地方の南北での後

期古墳築造の差異

（一）関東における前方

後円墳の多出

欽明朝ぐらいの時期になると、関東で前方後円墳がたくさん造られるようになります（図15）。一方で、大和の方では王権の力が非常に強くなり、それまで前方後円墳を造っていた豪族たちが前方後円墳を止め、大きな円墳や方墳を造るようになつてくるわけです。官僚化が進んだ状況で、

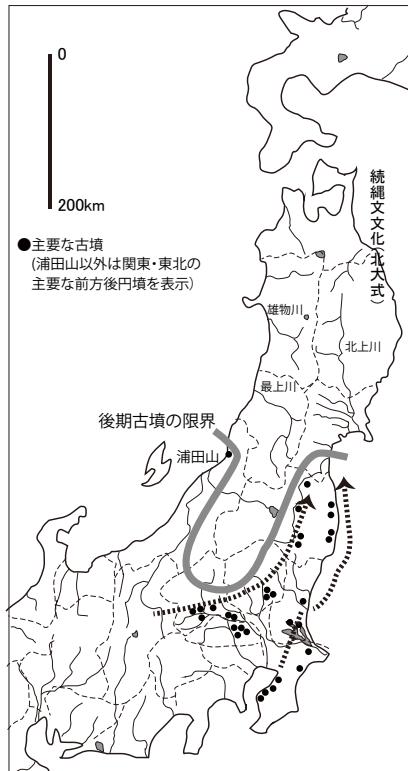


図 15 古墳後期の状況

られたかといいますと、王家や中央氏族が東国の勢力と強くタイアップをした。経済的・軍事的に東国に依存をして互恵的関係を結んだと考えられます。屯倉のような経済基盤を、東国各地に置いていくということを行います。そういうなかで古い価値体系である前方後円墳制度を温存する状況が残りました。関東の中では倭王権とタイアップしたことを周りに見せつけ、他の在地豪族と差別化するため前方後円墳をたくさん造っていたのです。

(二) 東北地方における前方後円墳築造の温度差

これだけの数の前方後円墳を造れる経済基盤があつたということで、この頃は関東の生産力がものすごく高まっていると思うのです。その経済力に倭王権は依存をするとし、またその経済力を高めるた

が前方後円墳を造るようになつてきます。そういう中で関東だけ前方後円墳を大量に造りつづけるという現象が起るんです。六世紀後半の倭の大型前方後円墳の大半は関東にあります。なぜ、関東にこんな前方後円墳がいっぱい造

能性が高いと言っています。このときに、福島県地域に前方後円墳が復活をしていくわけなのです。同時に東北地方南部にも国造が任命されたのではないかと推定をされているところです（図16）。この頃、この東北地方に復活する古墳の様式というのは常陸と非常に似ています。常陸の埴輪様式、それから常陸を介した横穴墓とか装飾古墳などを導入していますので、東北地方南部をもり立てたのは、在地の人々と共にこの関東の常陸とか、もともと人がやつてきた千葉とか南関東の影響でもう一回、前方後円墳が復活してくる可能性が高いと思います。

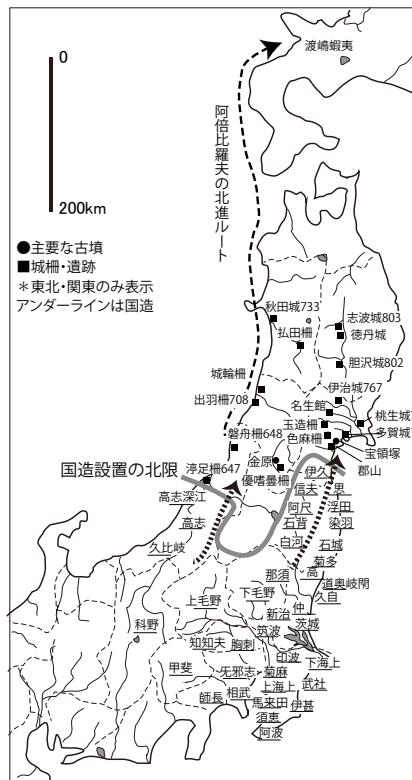


図 16 東北・関東の古代の関係図

ために部民を配置したり、新しい渡
来系の技術などを投入していくと
いうことが行われました。こうい
う前方後円墳乱立の時期の一一番最
後におそらく国造の任命があるん
だろうと考えられます。専修大学
の土生田先生は、各地の最後の前
方後円墳こそ、初代の国造墓の可

六 終末期から末期古墳の動向終末期古墳と横穴墓の展開

その古墳時代が終わるとき、そこにも大きな画期性があります。一つは関東系土器の出現と集団移住です。六世紀後半ぐらいから仙台平野、それから宮城県にかけて関東系土器が出てきますので、ここでまたかなりの移民が発生したのだろうと言われております（写真11）。そして、大規模群集墳や横穴墓、これが宮城県の北部まで造られています。こういう広域的な関東系土器や人の移動現象というものは、文献の記事よりもちょっと早く起こっています。文献では、上毛野君形名のさみかたなの蝦夷征討將軍の就任ですとか、阿倍比羅夫の北征とか、7世紀の中頃から現れるのですけれども、考古学的にはそれよりもだいぶ早く関東の人たちの北へのアプローチというのは始まっていると考えられます。それから、関東系の人々の影響のほかに、もつと広域的な人の移動というのもあります。その代表は「肥後型横穴墓」です。ここが今日のテーマとちょっとだけ重なつてくるのですけれども、鞠智城がある菊池川流域に盛行した肥後型横穴墓というのが宮城県の一番北端に造られているのです（図17）。九州と東北との人的交流がこの頃から起こっていることがわかります。参考としまして、『続日本紀』に陸奥国の志太郡の生王五百足みぶいおたりという人が白村江の戦いに従軍したという記事があるんです。この志太郡というのは、まさにこの大崎地域のことだといわれておりますので、文献と考古学的な証拠というのがマッチングしてくる。いずれにしても、東北で前方後円墳が復活する地域、それと国造が置かれている地域というのが重なつていきます（図15・16）。そして、これより北が城柵が作られていく地

域ということになります。

写真12は大崎市の鳴瀬川南岸にあります川畠横穴墓群の写真ですけれども、これが東北の肥後型横穴墓です。図17のように三方に棺座を作りだします。菊池川流域の横穴墓も三方に棺座を作り出しており、そつくりですね。

小結

時間になりましたのでまとめますけれども、古墳時代における東北へのアクセスというのは、古墳前期の大規模移住から始まります。環境難民が太平洋側、日本海側から東北に大量に移住をしていて古墳文化を開きました。それで前期のうちに農業開発に成功をし、東日本三大前方後円墳の一つである雷神山古墳を造りあげる。私は王権との連合を果たしたのではないかなと思っています。その辺のエリアが、後の伊治城と合致している。

それから中期後半になりますと前方後円墳と古墳文化が北進します。この中期後半というのは、汎列島的な技術革新の時代です。明治維新と同じぐらいの革新の時代だと思っているのですが、朝鮮半島の新しい技術を導入して列島中が技術革新に燃えた時期です。その波がちゃんと東北まで来ています。だということになります。その北進した交易拠点・開発拠点が胆沢城と合致しているということです。さらに、関東を飛び越えた中央との関係も見られます。中期の石棺のダイナミックな動きに加え

て、中期後半には窯業、須恵器生産が始まりますが、東北の須恵器窯は関東の須恵器窯より古く始まるのです。非常に先進的な動きも見せているということになります。

後期後半には、中央の王家や中央氏族との政治的結合を進めた関東と、東北地方南端エリアは同じ流れの中に位置付いてくるということで、国造が置かれるなど、非常に関係性を密にします。そういう流れの中で集団交流が活性化をして、例えば九州から人が動くだとかということも起ってきます。ということで、今後の課題ですけれども、蝦夷とされた人々は、得たいのしれない人たちではなくて、かつては古墳を造っていた人たち、しかも古墳前期には大型前方後円墳を造っていたような古墳文化に浴した人たちも含まれているということですね。歴史的な形成過程は多様で、その多様さを把握していく必要があるだらうと思います。しかしながら、やはり東北地方は環境的に厳しいです。環境変動の中で古墳の築造状況が伸び縮みを繰り返すのですが、その環境変動を克服していくような社会はどう成立していくのだろう、それが



図 17 肥後型横穴墓の比較
(熊本県教委 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』、池上悟 2000『日本の横穴墓』雄山閣)

律令社会にどう結びつくのだろうと
いうことを、気候変動も含めて考え
ていく必要があるだらうと思います。
そして北海道からも須恵器が出るわ
けですが、そういう広域経済活動と

日本列島全体の「物流ネットワーク」を、これからよく考えていく必要があるだろうと思います。こういったダイナミックな動きがあつた後に、城柵が造られていくということをご紹介いたしました。どうもありがとうございました。